

愛着と情動制御

—— 対人様式としての愛着と個別情動に対する意識的態度との関連 ——

坂上裕子¹ 菅沼真樹²

大学生を対象に、対人様式としての愛着と情動制御との関連を検討した。情動制御の一側面として、本研究では意識レベルでの情動情報の処理に着目した。まず研究1で、「個別情動に対する意識的態度尺度」を作成した。これは、代表的な4情動(怒り, 悲しみ, 恐れ, 喜び)に対して、個人が意識の上でどのような態度や備えを有しているかを測る尺度であり、4つの下位尺度(内省傾向, 自己の情動の覚知, 他者の情動の覚知, 情動に対する不快感)から構成された。次に研究2で、大学生208名に、愛着に関する尺度(戸田, 1988)と個別情動に対する意識的態度尺度への回答を求め、両尺度の関連を検討した。その結果、両者には弱いながらも関連が認められた。すなわち、愛着の安定性の高い人は、自他の悲しみや喜びに対する内省や覚知が高く、回避性の高い人は、悲しみや喜びに対する不快感が高い傾向があった。また、両極性の高い人は、自他の怒り、喜びの覚知が低い傾向があった。以上より、各愛着特性は、特定の情動に対する意識の上での異なる態度や構えと関連しており、それらの態度や構えが、各愛着スタイルを維持するように働いているのではないかと考察された。

キーワード：情動制御, 愛着, 個別情動, 意識的態度, 大学生

問題と目的

本研究では、情動に関する機能主義的見解と愛着理論とを理論的背景として、情動制御の個人差を、対人様式としての愛着との関連から検討する。

情動制御とは 従来、情動制御という語は、対処とほぼ同義の語として用いられてきた。対処の研究では、情動が喚起された時に、個人が認知や諸行動を介して情動反応をいかに制御するかに焦点が当てられ、主として、特定の対処方略の使用と個人の適応との関係などが検討されてきた。このことからうかがえるように、古くからの対処研究では、情動は他の過程の統制下におかれるべき対象として捉えられており、暗に、情動の持つ否定的側面や影響が強調されてきたと言える。

これに対し最近では、情動の持つ適応的な側面に焦点化して、情動制御という術語を用いる論者もある。例えば、機能主義的情動観を唱える Camposら(Barrett & Campos, 1987; Campos, Campos & Barrett, 1989)は、対処という術語が含意するところに加え、情動が他の諸過程(対人関係や個人の注意, 記憶, 行動など)を制御するという意味で、この語を用いている。彼らは、情動の持つ性質や役割として、個人内ならびに個人間における信号機能を強調する。すなわち、情動は、個人が環境

に適応するのを助けるべく、個人内においては自己の置かれている状況を自身に知らせ、その後の注意や行動を導くという、フィードバック的信号としての役割を果たすという。また、個人間においては、表出を介して、自身の状態や周囲の状態に関する情報を他者へ知らせ、他者の行動を導く、という役割を果たすという。

このような考えに基づいて情動制御という術語を用いるならば、次の過程も情動制御の重要な一面に含まれるだろう。機能主義では、個々の情動はそれぞれ個別の信号価、あるいは適応的な意味を有すると考える。ゆえに、情動の適応的機能が十分に発揮されるためには、全ての情動が利用されなくてはならないという。例えば Tomkins(1962)は、よく発達した人格においては、全ての情動レパートリーが利用可能であり、各情動が個々の適応的目的のために発達していると述べている。また、Cole, Michel & Teti (1994)は、あらゆる範囲の情動にアクセスできるかどうかを、情動制御の一側面に含めている。両者の見解をまとめると、個人内、個人間において、あらゆる情動シグナルの受発信が、ある程度の正確さをもって円滑になされるかどうかということも、情動制御の一要素として含まれるのだと言える。

愛着と情動制御 では、個人内、個人間における情動シグナルの受発信という点から情動制御を捉えた場合、これにはどのような個人差があり、また、それは

¹ 帝京大学文学部心理学科

² 日本学術振興会特別研究員

何に由来すると考えられるのだろうか。それは、個人の対人関係や適応にどう関わるのだろうか。この問題についてはこれまで、愛着の研究の中で探求されてきた。

愛着理論 (Bowlby, 1969, 1973, 1980) では、情動制御の個人差は、乳幼児期からの愛着関係に内在する情動経験の質に由来すると考える。子どもは養育者との相互作用の経験を通して、養育者の行動あるいは応答可能性に関する期待 (内的作業モデル) を形成する。この期待に基づいて子どもは、愛着に関連した情動や行動、認知や注意、記憶を組織化し、その際に、自身の養育環境にもっとも適合した方略を発達させていくという。この方略は、後に他の対人関係一般にも適用され、個人の対人関係のあり方に一貫性と安定をもたらす (Main, 1990; Main, Kaplan & Cassidy, 1985) と考えられている。

愛着の個人差に関する研究は、Ainsworth, Blehar, Waters & Wall (1978) によってストレンジ・シチュエーション法が開発されて以来、盛んに行われてきた。ここでは、乳幼児の愛着の個人差に、親との愛着関係が安定している安定型、親との愛着関係が不安定である回避型、両価型の3つのタイプがあることが確認されてきた。その後、発達心理学の領域では Main ら (Main & Goldwin, 1985-1999) によって、また社会心理学の領域では主として Hazan ら (Hazan & Shaver, 1987) によって、乳児の3つの愛着タイプに相当する愛着スタイルを、成人にも想定できることが確認されてきた。

Bretherton (1990) は、こうした愛着の個人差を説明する際に「オープンコミュニケーション」という考えを呈示している。Bretherton によれば、安定した愛着関係では、互いが互いの送出している情動シグナルを認識しており、意味のあるフィードバックを受け取っている、つまり、オープンな情動的コミュニケーションが促進されているという。いっぽう不安定な愛着関係では、情動的やりとりにおいて選択的にある種のシグナルが無視されるのが特徴であり、偏ったコミュニケーションパターンが作られる。そして、愛着対象との間でオープンなコミュニケーションがなされないと、パートナー間だけでなく、個人内でも情報の流れが制限されることになるという。情動制御を個人内、個人間における情動シグナルの受発信という観点から捉えた場合、Bretherton のこの記述は、愛着と情動制御が密接な関係を持つことを示唆している。

愛着と情動制御の関連についての実証研究 そこで次に、愛着と情動制御の間に具体的にはどのような関係が想定されるのかを、成人の愛着に関する先行研究を通して見ていく。ただし、その前に、ここで用いる

愛着スタイルという術語の意味を明確にしておく。

現在、成人の愛着に関する研究には、発達心理学系の研究と、社会心理学系の研究の2つの流れがある。発達心理学系の研究では成人愛着面接 (AAI) (George, Kaplan & Main, 1996) という手法によって愛着を測定する。AAI では、親子関係に関する語り方の特徴に基づいて個人の愛着スタイルの分類が行われる。そこで測定されるものは、愛着に関する個人の心的状態 (内的作業モデルによって、個人が愛着経験に関連した記憶や情動をどのように組織化しているか) であり、これは通常、個人に意識化されないものと考えられている。いっぽう社会心理学系の研究 (例えば Hazan & Shaver, 1987) では、成人の愛着を質問紙で測定するのが一般的である³。また、社会心理学系の研究では主に、親子関係ではなく、対人関係一般における自分や他者についての認識に焦点を当てる。そこで測定されるものは、内的作業モデルが働いた結果、自分がどのような対人様式を持っているのか、個人が意識化している対人的態度の特徴であると考えられる (遠藤, 1992)。本論文では社会心理学系の愛着研究を取り上げて紹介するので、以降、本文で愛着スタイルとでてくる場合には、このような対人様式をさすものとする。

社会心理学系のこれまでの研究では、愛着と対処行動との関係を調べたもの (Mikulincer, Florian & Tolamcz, 1990; Simpson, Rholes & Nelligan, 1992; Mikulincer & Florian, 1995) が多かったが、最近では、愛着と情動に関する情報処理との関係を調べた研究も提出されつつある。例えば、Pietromonaco & Barrett (1997) は、大学生を対象に、対人的やりとりにおける実際の情動経験と、それらの経験に関する回顧記録とを比較することで、愛着スタイルと記憶バイアスとの関係を調べている。その結果、回避スタイルの人は、実際のやりとりでは不快情動を多く経験するにもかかわらず、回顧報告では再生が困難であること、また、両価スタイルの人は、回顧報告では実際に経験したよりも強い情動を経験したと報告し、情動的な事象をはっきりと再生しやすい

³ 社会心理学系の研究で用いられる、質問紙による愛着の測定方法には、大きく分けると2つのアプローチがある。1つは、強制選択法によって個人を特定の愛着スタイルに分類するタイプ論的アプローチ、もう1つは、多項目尺度によって愛着に関わる特性の得点を個人に割り振る次元論的アプローチである。現在のところ、両方のアプローチの研究が混在しており、また、研究者の中には、同一研究の中で両方のアプローチを用いる者もいる。どちらのアプローチが妥当であるかについては現在まだ論争中であり、明確な結論は得られていない。本研究で引用している先行研究にも、その両方のアプローチのものが含まれている。

ことを示している。

Pietromonaco らの研究は、快、不快以上には情動を細分化していないが、より個別の情動に着目して、愛着と情動制御の関連を調べた研究も少数ながらある。Magai, Distel & Liker (1995) は、愛着に関連した情動経験の偏りや情動に関する認知の歪みを調べるため、成人を対象に質問紙調査を行った。Magai らは愛着と、日常の主観的情動経験の頻度、ならびに表情写真を用いた情動表出の解読課題の成績との関連を検討した。その結果、安定性が高い人ほど、快情動の経験が多いと報告し、情動表出の解読が正確だったという。いっぽう、回避性が高い人ほど、怒りや悲しみを多く経験すると報告し、快情動の解読が不正確だったという。また、両価性が高い人は、怒りや恐れを多く経験すると報告し、怒りの解読が不正確だったという。

Mikulincer & Orbach (1995) は、大学生を対象に、愛着スタイルによる、過去の情動経験に関する情報処理様式の違いを検討した。彼らは協力者に、過去に経験した怒り、悲しみ、不安、喜びのエピソードの想起を求め、愛着スタイルによって、その検索時間がどう異なるかを調べた。その結果、回避スタイルの人は過剰に抑圧を働かせるのが特徴であり、3つのスタイル中、情動エピソードの想起にもっとも長い時間を要したという。これに対し、両価スタイルの人は不快情動に結びついた記憶を抑圧するのが困難であり、3つのスタイル中、検索に要した時間がもっとも短かったという。また、彼らは喜びのエピソードを想起するのに、他の情動エピソードに比べより長い時間を要したという。安定スタイルの人は、不快情動に関する記憶を検索するのに、他の2つのスタイルの人の中間程度の時間を要し、また、悲しみや喜びのエピソードよりも、怒りや不安のエピソードを想起するのにより多くの時間を要したという。

以上の研究は、①個人が情動をどのように知覚したり経験したり認識するか、つまり個人が多段階にわたる情動に関する情報の処理をどのように行うかは、個人の愛着スタイルと関係がある、②安定した愛着は、円滑かつ歪みの少ない情動情報の読みとりと関係している、③不安定な愛着は、情動情報の読みとりにおける歪みや妨害と関係している、④不安定な愛着のうち、回避的な愛着は、情動情報の読みとりの抑制と関係しており、両価的な愛着は、情動情報の過剰な読みとりと関係している、⑤愛着と情動情報の読みとりの歪みの関連は、特定の情動に関して特異的に見られる可能性があることを示唆していると考えられる。

目的 本研究では、愛着と情動制御との関連についてさらに理解を深めるべく、先行研究での検討が十分ではない⑤の点、すなわち愛着と個別の情動(ここでは、怒り、悲しみ、恐れ、喜びの4つ)に関する情報の処理との関連について検討を行う。その際、本研究では、情動に関する情報の処理の中でも、これまであまり取り上げられなかった側面として、比較的意識的なレベルでの情動情報の処理に焦点を当てる。情動に関する情報の処理には、自動的、無意識的な処理から、より自覚的、意識的な処理まで、複数の段階を想定しうる。先行研究で主に扱われてきたのは、無意識的な処理段階における個人差であり、比較的意識的な処理段階にどのような個人差があるのかについてはほとんど検討されてこなかった。しかしながら、意識化されない自動的な処理段階での歪みは、意識レベルでの情動に対する態度、例えば、自分や他者の情動をどの程度明確に意識化しているか、情動についてどの程度深く考えてみるか、情動経験や情動表出そのものについてどう考えたり感じたりしているか、ということにも反映されるものと考えられる。また、これとは逆に、個人が情動に対して持っている意識的な態度や信念が、個人には意識化されない、自動的な処理過程を方向づけることもあると考えられる。このような理由から、意識的なレベルでの情動に対する態度に焦点を当てることは、意義のあることだと思われる。

そこで、本研究では、愛着と意識レベルにおける情動に関する情報の処理の関係を、3つの指標の関連を調べることによって検討する。

愛着の測定には、詫摩・戸田 (1988) の成人版愛着スタイル尺度を用いる。これは、Hazan & Shaver(1987) の強制選択法による愛着スタイル尺度⁴を、多項目尺度に作りかえたものである。この尺度では、3つの愛着スタイルを特性的なものとして捉え、各愛着スタイル傾向(安定性、回避性、両価性)の強さを個人内で相対比較することによって、愛着の個人差を測定する。この詫摩・

⁴ Hazan & Shaver (1987) は、Ainsworth et al. (1978) の各愛着タイプの特徴に関する記述を、対人関係一般における他者や自己についての認識に関する記述として書きかえた。そして、各タイプの文の中で自分にもっともあてはまるものを1つ、強制的に選択させることで、成人において愛着スタイルを特定することを試みた。Hazan らは、各愛着スタイルの特徴を次のようにまとめている。安定群の人は、他者と親密になることを快いと感じ、必要な時に他者を頼ることができ、自分は愛され、価値のある人間だという自信を持っている。回避群の人は、他者と親密になることや他者に頼ることに不快を感じる。また、両価群の人は、他者と親密な関係を持つことを切望し、他者に拒絶されたり捨てられることを恐れる。

戸田 (1988) の尺度は、次元論的アプローチによる尺度 (注3参照) であり、個人を何れかの愛着スタイルに強制分類することを目的とした尺度ではない。しかし、本研究ではこの尺度を、個人の各愛着スタイル傾向の強さを測定すると同時に、個人を特定の愛着スタイルに分類する目的でも使用してみる。それは、次元論的アプローチとタイプ論的アプローチ (注3参照) の両方を用いることによって、愛着と情動に対する意識との関係について、異なる角度から捉えることができると考えられるためである。すなわち、多項目尺度による測定法を用いる次元論的なアプローチは、対人関係における人の思考や行動、感情の組織化の個人差の根底にある、愛着の構成要素に着目したものと見える。ゆえにこのアプローチは、それらの個人差を説明する潜在的メカニズムを考える上で有効だと考えられる (Fraley & Waller, 1998)。いっぽう強制選択法のように、個人を特定の愛着スタイルに分類するタイプ論的なアプローチは、個人を総体的に捉えた際の対人様式に着目したものと見える。ゆえにこのアプローチは、特定の対人様式を持つ人に共通する、思考や行動、感情の特徴を把握する上で有効だと言える。したがって、両方のアプローチを併用することによって、各愛着スタイルがどのような情動制御のあり方によって維持されるのか、そのメカニズムについての示唆を得られると同時に、各愛着スタイルを持つ人の情動制御の特徴を明らかにできるという、積極的な利点があると考えられる。

意識レベルでの情動に関する情報の処理については、2つの指標 (主観的情動経験の頻度、個別的情動に対する意識的態度) を用いて調べる。前者と愛着との関連は Magai et al. (1995) が既に検討しているため、その追試となる。後者については、既存の尺度がないため、独自に尺度を作成する (研究1)。その上で、愛着スタイルと意識レベルでの情動情報の処理との関連を明らかにする (研究2)。

仮説としては、次のような関連が見出されると考えられる。まず、安定した愛着は、理論的には、円滑かつ歪みの少ない情動情報の読みとりによって特徴づけられると考えられている。ゆえに、安定愛着は、意識的なレベルにおいても、情動に対するオープンな態度、例えば、自他の情動に対する内省の高さや覚知の高さなどと関係があると考えられる。いっぽう、回避的な愛着は、情動情報の読みとりの抑制と関係していることが先行研究では示されている。ゆえに、意識的なレベルにおいては、情動に対する内省の低さや覚知の低

さ、情動に対する否定的な構えと関係があるのではないかと考えられる。両価的な愛着は、先行研究では、情動情報の過剰な読みとり、特に自身の不快情動の過剰な意識化と関連があることが示されている。これは、自他の情動を客観視することを困難にすると考えられ、ゆえに、情動についての内省の低さや覚知の低さとつながっているのではないかと考えられる。

さらに、各情動が持つ機能を考慮すると、これらの関係は、特定の情動に対する態度に顕著に見られることが予想される。まず、安定的な愛着と回避的な愛着は、悲しみと喜びに対する態度と特に関係があると推測される。悲しみの社会的機能は、他者から擁護や共感、援助を引き出すことであり、喜びの機能は、快感情の伝染を通して、他者との社会的つながりを促進することだとされている (Malatesta & Wilson, 1988)。つまり、悲しみも喜びも、他者との絆を深める機能を持つ情動だと言える。他者と親密になることを快いと感じるのが安定愛着の特徴であり、他者と親密になることを不快と感じるのが回避愛着の特徴であることから判断すると、両者は、悲しみ、喜びに対する態度において、対照をなすものと考えられる。両価的な愛着については、他者から拒絶されたり捨てられるのを恐れることがその特徴であることから判断すると、自分と他者の絆を壊す恐れのある、怒りという情動に対する態度に特徴があるのではないかと考えられる。

研究1 「個別情動に対する意識的態度尺度」の作成

研究1では、「個別情動に対する意識的態度尺度」の作成ならびにその信頼性、妥当性の検討を行う。尺度は、3回の調査を経て作成された。

調査1 予備調査として、大学生32人を対象に個別面接を行った。面接では、Gottman, Katz & Hooven (1997) のメタ・エモーション・インタビューを参考に、自分自身や親密な他者の情動経験について、各情動(怒り、悲しみ、恐れ、喜び)ごとに、どのような時に情動を経験するか、情動を経験した時にはどうなるか、自他の情動経験をどのように意味づけているか、などを尋ねた。その後、面接で得られたプロトコルをもとに、個人差の大きかった回答に着目して、質問項目を作成した。最終的に、各情動につき27項目 (内容はいずれの情動についても同じ) を作成した。

調査2 調査1で作成した質問項目 (各情動につき27項目、合計108項目) からなる質問紙を、大学生131名 (男性87名、女性44名、平均年齢19.5歳) に実施した。回答者には、7件法にて評定を求めた。各情動ごとに、項目の

取捨選択を行いながら、主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った。その結果、いずれの情動に関してもほぼ同じ4因子が抽出されることが確認された。27項目のうち、負荷量の低い、あるいは複数の因子に同時に高い負荷量を示した5項目は削除し、22項目を残すことにした。

調査3 調査2で選定した88項目(各情動につき22項目)からなる質問紙を都内及び近郊の国立、私立、計8大学の学生812名に実施した。各項目について、自分どの程度あてはまるかを7件法で評定してもらった。分析には欠損値のない747名(男性362名,女性380名,性別不明5名)分のデータを用いた。年齢幅は18~48歳,平均年齢は19.9歳であった。

ここで得られたデータは三相データであるが、調査2の分析で、いずれの情動に関してもほぼ共通の項目からなる因子が得られることが確認されたため、次の分析では、データを(回答者747名×4情動)×22項目の二相データとして扱い、主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った⁵。つまり、1人の回答者の4情動に対する回答を、各情動ごとに独立した1つのデータとみなして4個のデータに分解した上で、因子分析を行った。この分析で、2つを不適切な項目として削除し、残った20項目について再度同様の手法で因子分析を行った。固有値の推移(第1因子から順に4.47, 2.11, 1.63, 1.56, 1.03, 0.98, 以下省略)ならびに解釈可能性からは、4因子がもっとも適切な因子数と判断された。4因子に指定したときの累積寄与率は、48.9%であった。この結果をTABLE 1に示す⁶。

抽出された因子は、情動に対する内省傾向、自己の情動の覚知、他者の情動の覚知、情動に対する不快感、と命名された。「情動に対する内省傾向」は、自他の情

⁵ データを二相構造に変えて因子分析を行ったのは、情動ごとに使用する項目が異なることのないよう、同一の項目からなる共通の因子を得ることを意図したためである。

⁶ 確認のため、個々の情動に関しても、20項目について主因子法・バリマックス回転による因子分析を行った。その結果、いずれの情動でも、スクリー基準及び解釈可能性からは4因子がもっとも適切であると判断され、また、TABLE 1に示した項目とほぼ同じ項目からなる4つの因子が得られた。すなわち、悲しみにおいてのみ、他者覚知の項目の1つが他者覚知の因子と自己覚知の因子の両方に比較的高い負荷量を示したが、その他の情動に関しては、全て共通した項目からなる4因子が得られた。さらに、最尤推定法による確認的因子分析を行ったところ、全ての情動で指定どおりの因子が得られた。また、情動ごとに適合度指標(GFI)、修正適合度指標(AGFI)を算出したところ、ある程度十分と判断される値が得られた(怒り, 悲しみ, 恐れ, 喜びの順に, GFIは.89, .90, .88, .89, AGFIは.86, .87, .84, .85)。

TABLE 1 個別情動に対する意識的態度尺度 バリマックス回転後の因子負荷量

	I	II	III	IV	共通性
第1因子 情動に対する内省傾向					
自分が**しているときには、なぜそういう気持ちになったのかをよく考える方だ	.72	.13	.04	.10	.54
**を経験することによって、自分というものをよりよく知ることができると思う	.69	.18	.07	-.10	.52
自分が**している時には、その気持ちをつみつめてみる方だ	.68	.19	.07	-.01	.51
人の**に触れることで、その人のことをよりよく知ることができると思う	.66	.10	.15	-.08	.48
人が**しているときには、何があったのだろう、と考えてみる	.60	-.01	.22	-.05	.41
第2因子 自己の情動の覚知					
自分が**しているときの状態や身体感覚はすぐイメージできる	.18	.71	.22	-.02	.58
最近自分が**した出来事を、すぐに思い浮かべることができる	.23	.70	.02	-.02	.54
自分が**しているときの状態や身体感覚を言葉にするのは簡単だ	.07	.56	.30	.02	.41
過去に自分が**した経験を聞かれても、たくさんは思い出せない*	-.10	-.70	.01	.14	.52
**している自分を想像しても、あまりぴんとこない*	-.09	-.72	-.05	.22	.59
第3因子 他者の情動の覚知					
表情や態度をみれば、人が**しているかどうかはすぐに分かる	.16	.01	.77	-.08	.63
人がどんなことで**するのは、容易に思いつく	.19	.15	.70	.04	.55
人が**している時の様子は、はっきりと思い浮かべられる	.25	.27	.60	.02	.49
人が**している時の様子を言葉にするのは難しい*	.16	-.38	-.41	.05	.34
言葉で言われないと、人が**しているかどうかは分からない*	-.06	-.02	-.59	.32	.45
第4因子 情動に対する不快感					
**した顔をみた人がいると、不愉快な気持ちになる	-.10	-.04	-.01	.72	.53
**している人と関わるのはいやだ	-.21	-.07	-.04	.69	.52
**することは、ただの時間の無駄だと思う	.16	-.05	-.14	.58	.38
**を感じることを、いやだと恥づかしいと思うことがある	-.17	-.18	.03	.55	.37
人に**を見せたあとで、悪いことをしてしまったとか、恥づかしいことをしてしまったと思うことがある	.29	-.00	-.09	.54	.38
説明分散	2.71	2.70	2.22	2.14	9.77

「**」にはそれぞれ、怒り、悲しみ、恐れ、喜びが入る
※がついている項目は反転項目

動の原因についてどの程度考えるか、情動を自己理解や他者理解の助けとして用いるか等を尋ねる項目から構成された。「自己の情動の覚知」は、自身の情動経験をどの程度明確に意識化しうるかを、また、「他者の情動の覚知」は、他者の情動表出や情動経験をどの程度明確に意識化しうるかを尋ねる項目から構成された。「情動に対する不快感」は、自他の情動表出や情動経験に対して、どの程度不快な感情を持っているかを尋ねる項目から構成された。どの下位尺度もそれぞれ、5項目から構成された。以下では順に、内省傾向、自己覚知、他者覚知、不快感と略記する。

尺度の信頼性と妥当性の検討 下位尺度について、情動ごとにCronbachの α 係数を算出したところ、内省傾向は.71~.80、自己覚知は.69~.81、他者覚知は.67~.74であり、3つの下位尺度に関しては、ほぼ十分な信頼性が確認された。ただし、不快感については、複数の情動において α 係数の値がやや低かった(怒り.54, 悲しみ.59, 恐れ.60, 喜び.75)。

調査3の協力者のうち203名(男性124名,女性79名)に,自意識尺度日本語版(菅原,1984)と他者意識尺度(辻,1993)への回答を求め,本尺度との相関を算出した。その結果,本尺度各情動の“内省傾向”と自意識尺度の“私的自己意識”との間に正の相関(.54~.69),他者意識尺度の“内的他者意識”との間に正の相関(.42~.54),本尺度各情動の“自己覚知”と,自意識尺度の“私的自己意識”との間に正の相関(.20~.46),本尺度各情動の“他者覚知”と他者意識尺度の“内的他者意識”との間に正の相関(.32~.42)があった。これより本尺度の併存的妥当性が確認された。

研究2 愛着と,意識レベルにおける個別情動に関する情報処理との関係の検討

研究2では,愛着と,主観的情動経験の頻度,ならびに個別情動に対する意識的態度の関連を検討する。

方法

調査協力者 都内国立,私立大学,計4大学の学生237名。このうち分析には欠損値のない208名(男性131名,女性75名,性別不明2名)のデータを用いた。平均年齢は20.3歳,年齢幅は19~27歳であった。

調査内容 ①愛着の測定 託摩・戸田(1988)の成人版愛着スタイル尺度を用いた。尺度は,各愛着スタイルに対応した3つの下位尺度(安定性(secrete)尺度,回避性(avoidant)尺度,両価性(ambivalent)尺度)から構成されている⁷。これを,「非常によくあてはまる」(6点)~「全くあてはまらない」(1点)までの6段階で評定してもらった。尺度の併存的妥当性,構成概念妥当性は託摩・戸田(1988),戸田(1988)で確認されている。

②主観的情動経験の頻度の測定 Izard, Libero, Putnam & Haynes (1993)の個別情動尺度IV版(DES IV: Discrete Emotion Scale IV)の一部を翻訳して用いた。これは,代表的な12情動の経験頻度を尋ねる36項目(各情動3項目)から成る質問紙である。このうち,怒り,悲しみ,恐れ,喜びに関する項目計12項目について,5段階にて評定してもらった。この尺度の内的整合性,時間的安定性は,坂上(1999)で確認している。

③個別情動に対する意識的態度の測定 「個別情動に対する意識的態度尺度」80項目(各情動20項目)を,「非常によくあてはまる」(6点)~「全くあてはまらない」(1点)までの6段階にて評定してもらった⁸。

⁷ 戸田(1998)の尺度では下位尺度名に原語があげられている(secrete尺度, avoidant尺度, ambivalent尺度)が,本論文では混乱を避けるため,これを訳して,安定性尺度,回避性尺度,両価性尺度と呼んでいる。

手続き 大学の講義時間内に一斉に調査を行い,調査票はその場で回収した。所要時間は約30分だった。

結果

尺度得点の算出

愛着スタイル尺度については,18項目の評定値を各項目の得点として用い,主因子法,バリマックス回転による因子分析を行った。その結果,戸田(1988)の報告と同じ3因子が抽出された(TABLE 2)。各因子を構成する6項目の評定値の加算平均を,それぞれの尺度得点とした。下位尺度間の相関は,安定性尺度一回避性尺度が-.28,安定性尺度と両価性尺度が-.24,回避性尺度と両価性尺度が.19だった。下位尺度の平均得点は安定,回避,両価の順に,3.64(.89),3.11(.82),3.52(.86)(()内は標準偏差)だった。

DES IVに関しては,各情動に関する3項目の評定値の加算平均を,各情動の主観的情動経験頻度の得点とした。平均と標準偏差をTABLE 3に示す。

個別情動に対する意識的態度尺度については,下位尺度を構成する5項目の評定値(逆転項目は7から評定値を引いたもの)の加算平均を情動ごとに算出し,尺度得点とした。平均と標準偏差をTABLE 3に示す。

愛着と主観的情動経験の頻度,個別情動に対する意識的態度との関連の分析

分析1 分析1では,愛着スタイル尺度の下位尺度の得点を各愛着スタイル傾向の強さとみなし,主観的情動経験の頻度,個別情動に対する意識的態度の尺度得点との相関をみた。両尺度の下位尺度得点間のPearsonの積率相関係数をTABLE 4に示す。以下では無相関検定で0.1%水準以下の確率で有意だったもののうち,|.20|より大きい相関の見られたものを挙げる。

まず,安定性得点は,怒りの主観的情動経験頻度と弱い負の相関(-.30),内省傾向,他者覚知とは弱い正の相関(順に.26,.22)があった。また,悲しみの内省傾向,自己覚知,他者覚知と弱い正の相関(順に.33,.23,.22),不快感とは弱い負の相関(-.22)があった。喜びについて

⁸ 「情動に対する意識的態度」尺度への回答を,予備調査の段階では,7件法にて評定してもらったが,本調査では6件法に変えた。これは,以下の理由による。7件法で実施した際に,全ての項目に「どちらともいえない」と回答した協力者が数人いた。質問紙に対する意見や感想から,情動に対する関心が非常に薄かったり,情動について考えたくないという人が,このように回答したのではないかと推測された。こうした人は,潜在的には情動に対する覚知や内省が低いことが予想されるが,7件法で「どちらでもない」に回答すると,評定値をそのまま得点として換算した場合,実際よりも高く見積られる可能性がある。本調査では,こうした可能性を避けるため,6件法を採用した。

TABLE 2 愛着スタイル尺度 因子分析の結果 (Varimax 回転後の因子負荷量)

	I	II	III	共通性
第1因子 (安定性尺度 $\alpha=.85$)				
私はすぐに人と親しくなる方だ	.88	-.07	-.15	.80
私は知り合いが出来やすい方だ	.86	-.01	-.16	.76
初めて会った人とでもうまくやっつけていける自信がある	.78	-.12	.02	.62
私は人に好かれやすい性質だと思う	.72	-.14	-.04	.55
たいいてい人は私のことを好いてくれていると思う	.66	-.20	-.06	.48
気軽に頼ったり頼られたりすることができる	.57	.07	-.40	.49
第2因子 (両価性尺度 $\alpha=.77$)				
あまり自分に自信がもてない方だ	-.25	.79	-.08	.69
ちょっとしたことで、すぐ自信をなくしてしまう	-.08	.77	.01	.59
自分を信用できないことがよくある	-.11	.69	.02	.49
時々友だちが、本当は自分を好いてくれているのではないかと、私と一緒にいたくないのではと心配になることがある	-.11	.67	.30	.55
人は本当はいいやや私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある	-.08	.65	.43	.61
私はいつも人と一緒にいたがるので、時々人から疎まれてしまう	.04	.59	-.14	.37
第3因子 (回避性尺度 $\alpha=.70$)				
人に頼るのは好きでない	-.07	-.11	.69	.49
私は人に頼らなくても、自分一人で十分にうまくやっで行かれると思う	.05	-.24	.67	.51
あまり人と親しくなるのは好きではない	-.29	.11	.66	.54
どんなに親しい間柄であろうと、あまりなれなれない態度をとられると嫌になってしまう	-.05	.05	.64	.41
あまりに親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められたりすると、イライラしてしまう	-.10	.17	.60	.39
人は全面的には信用できないと思う	-.13	.33	.57	.45
説明分散	3.61	3.21	2.96	9.79

太字は因子負荷量 |.40| 以上

TABLE 3 主観的情動経験の頻度ならびに個別情動に対する意識的態度尺度得点の平均と標準偏差

	個別情動に対する意識的態度				
	主観的情動経験頻度 平均(標準偏差)	内省 平均(標準偏差)	自己覚知 平均(標準偏差)	他者覚知 平均(標準偏差)	不快感 平均(標準偏差)
怒り	2.57(.89)	4.00(.88)	3.62(.96)	3.92(.74)	3.98(.82)
悲しみ	2.66(.88)	4.32(.98)	3.70(1.02)	3.68(.70)	2.76(.76)
恐れ	2.09(.88)	3.97(.84)	3.69(.89)	3.51(.65)	3.16(.76)
喜び	3.43(.75)	4.08(.84)	4.45(.96)	4.33(.79)	2.02(.75)

(とりうる得点範囲は、主観的情動経験の頻度が1~5点、個別情動に対する意識的態度各下位尺度が1~6点)

は、主観的情動経験頻度、内省傾向、自己覚知、他者覚知と弱い正の相関(順に.28, .35, .39, .26)があった。

回避性得点は、怒りの主観的情動経験頻度と弱い正の相関(.26)があった。また、悲しみに対する不快感と弱い正の相関(.25)があった。さらに、喜びの主観的情動経験頻度、内省傾向、自己覚知、他者覚知とは弱い負の相関(順に-.24, -.26, -.25, -.22)が、不快感とは中程度の正の相関(.41)があった。

両価性得点は、怒りの主観的情動経験頻度と弱い正の相関(.28)があった。また、悲しみに関しては、主観的情動経験頻度と中程度の正の相関(.49)、不快感と弱い正の相

TABLE 4 愛着スタイル尺度と主観的情動経験の頻度、個別情動に対する意識的態度尺度得点間の相関係数

情動名	主観的情動経験頻度	内省傾向	個別情動に対する意識的態度			
			自己覚知	他者覚知	不快感	
安定性尺度	怒り	-.30***	.26***	.11 (.18**)	.22***	-.02
	悲しみ	-.18***	.33***	.23***(.27***)	.22***	-.22***
	恐れ	-.20**	.18**	-.02 (.04)	.18**	.01
	喜び	.28***	.35***	.39***(.32***)	.26***	-.16
回避性尺度	怒り	.26***	-.13	-.05 (-.10)	-.01	.10
	悲しみ	.10	-.18**	-.10 (-.03)	-.20**	.25***
	恐れ	.09	.00	-.03 (-.06)	-.03	.14
	喜び	-.24***	-.26***	-.25***(-.17)	-.22***	.41***
両価性尺度	怒り	.28***	-.18**	-.16 (-.22***)	-.20**	.09
	悲しみ	.49***	-.13	.03 (-.05)	-.06	.23***
	恐れ	.45***	-.04	.10 (-.03)	-.15	-.02
	喜び	-.19**	-.14	-.36**(-.32***)	-.21**	.20**

() 内数値は、主観的情動経験頻度の影響を除いた偏相関係数
*** $p<.001$, ** $p<.01$, $n=208$

関(.23)があった。恐れに関しては、主観的情動経験頻度と中程度の正の相関(.45)が、喜びに関しては、自己覚知、他者覚知と弱い負の相関(順に-.36, -.21)があった。

さて、主観的情動経験の頻度と情動の自己覚知は正に相関することが予想される。そこで、各情動について両者の相関を算出してみたところ、怒り、恐れ、喜びについて、1%水準以下の有意な正の相関(順に.19, .28, .38)が確認された。そこで、主観的情動経験頻度の影響を取り除いた上での、愛着スタイル尺度と自己覚知の偏相関係数を算出した(TABLE 4 () 内の数値)。その結果、両価性得点と怒りの自己覚知の相関係数の値は上昇し(-.22)、1%水準以下で有意となった。

分析2 分析2では、愛着スタイル尺度の得点に基づいて回答者を安定群、回避群、両価群の3つの愛着群に分類し、主観的情動経験の頻度、個別情動に対する意識的態度尺度の得点の群間差を検討した。

回答者の分類手続きとして、ここでは、強制選択法に近似させる形をとった。すなわち、愛着スタイル尺度の3つの下位尺度の中で、その個人がもっとも高い得点を得た下位尺度に相当する愛着スタイルを、その人のドミナントな愛着スタイルとみなすことにした。この手続きで、93名(男59,女34)を安定群、34名(男20,女14)を回避群、70名(男45,女25)を両価群と同定した。複数の下位尺度で同得点を示した11名については特定の愛着スタイルを同定できないため、分析2の対象からは除いた。各愛着群の愛着スタイル尺度の平均と標準偏差をTABLE 5に示す。愛着スタイル尺度について愛着群を要因とした1要因3水準の分散分析を行ったところ、全ての下位尺度において、愛着群の主

効果が有意であった (TABLE 5)。

愛着群別にみた主観的情動経験の頻度を FIGURE 1 に、情動別にみた、各愛着群の個別情動に対する意識的態度の尺度得点の平均と標準偏差を FIGURE 2~FIGURE 5 に示す。情動の主観的経験頻度ならびに個別情動に対する意識的態度尺度について、愛着群を要因とする 1 要因 3 水準の分散分析を行った (TABLE 6)。その結果、主観的情動経験の頻度に関しては全情動で愛着群の主効果が有意であり、多重比較の結果、怒り、悲しみ、恐れに関しては回避群、両価群が安定群よりも有意に得点が高く、喜びに関しては安定群が回避群、両価群より有意に得点が高かった。個別情動に対する意識的態度に関しては、回避群が安定群より、悲しみおよび喜びに対する不快感の得点が有意に高かった。また、喜びの自己覚知の得点は、安定群が回避群よりも有意に高かった。怒りの内省傾向と他者覚知、悲しみの内省傾向、喜びの内省傾向と自己覚知、他者覚知の得点は、安定群が両価群より有意に高かった。

考 察

分析 1, 2 を通して、愛着と情動に対する意識的な態度との間には関連があり、それらの関連は、特定の情動において認められることが明らかになった。ただし、両者の間に認められた相関のほとんどは .2~.3 代と低く、関連としては強いものではなかった。

まず、安定的な愛着は主に、怒り、悲しみ、喜びに

TABLE 5 愛着スタイル尺度 尺度得点の平均と標準偏差ならびに分散分析の結果

	安定群	回避群	両価群	F 値	多重比較の結果
	平均 (標準偏差)	平均 (標準偏差)	平均 (標準偏差)	F(2,194)	(Tukey-Kramer 法, p<.05)
安定性尺度	4.27 (.67)	3.12 (.68)	3.04 (.67)	78.71***	安定群>回避群, 両価群
回避性尺度	2.65 (.68)	4.24 (.70)	3.07 (.66)	67.39***	回避群>安定群, 両価群
両価性尺度	3.04 (.65)	3.22 (.74)	4.22 (.65)	73.37***	両価群>安定群, 両価群>安定群, 回避群

***p<.001, **p<.01

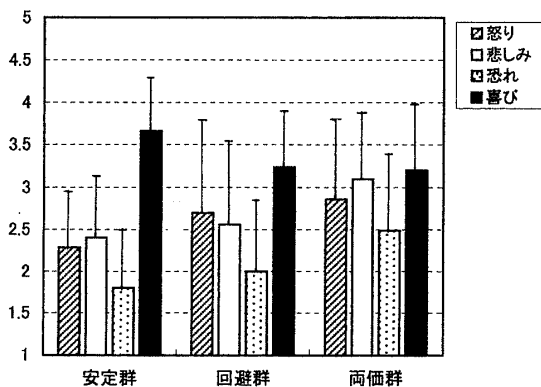


FIGURE 1 主観的情動経験の頻度

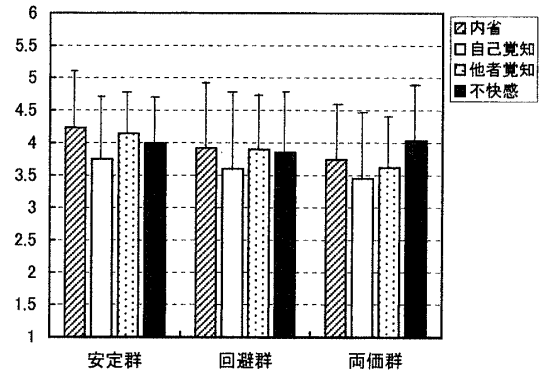


FIGURE 2 怒りに対する意識的態度

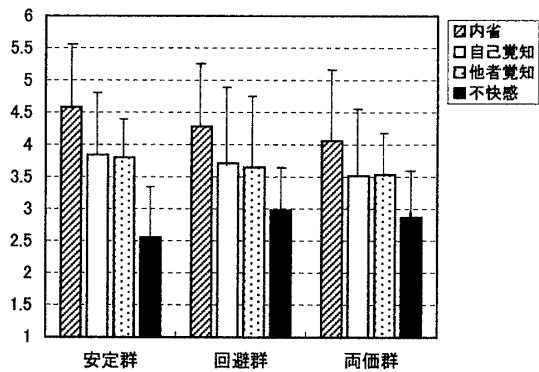


FIGURE 3 悲しみに対する意識的態度

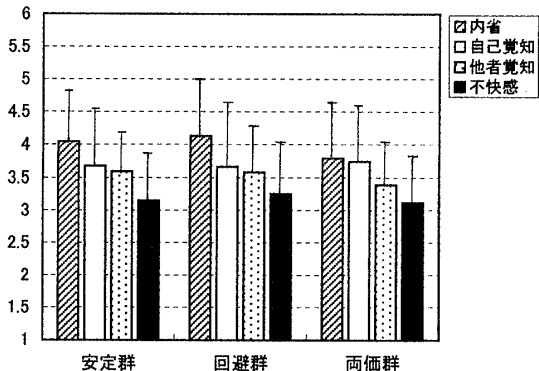


FIGURE 4 恐れに対する意識的態度

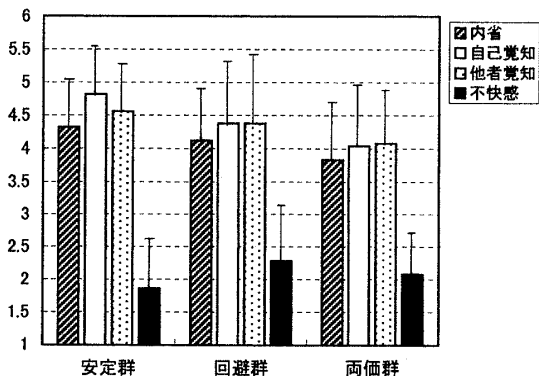


FIGURE 5 喜びに対する意識的態度

TABLE 6 主観的情動経験の頻度、個別情動に対する意識的態度尺度得点の分散分析の結果

情動名	有意差のあった下位尺度	F値 (F(2,194))	多重比較の結果 (Tukey-Kramer法, $p < .05$)
主観的経験頻度			
怒り		9.86***	安定群<回避群, 両価群
悲しみ		14.64***	安定群<回避群, 両価群
恐れ		13.44***	安定群<回避群, 両価群
喜び		9.6***	安定群>回避群, 両価群
情動に対する意識的態度			
怒り	内省傾向	6.3*	安定群>両価群
	他者覚知	10.49***	安定群>両価群
悲しみ	内省傾向	6.02*	安定群>両価群
	不快感	4.21*	安定群<回避群
喜び	内省傾向	7.19***	安定群>両価群
	自己覚知	15.11***	安定群>回避群, 両価群
	他者覚知	7.68***	安定群>両価群
	不快感	4.48*	安定群<回避群

(*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$)

対する意識的な態度と関連があることが示された。すなわち、分析1では、愛着の安定性の高さは、これら3つの情動に対する内省傾向や他者覚知の高さと関連していることが、また、悲しみや喜びに関しては、自己覚知の高さとも関連していることが示された。分析2では、安定群に分類された人は、両価群の人に比して、怒りや悲しみ、喜びについてより内省する傾向があること、また、回避群の人に比べると、悲しみや喜びに対して不快感を持っていないことが示された。これは、Mikulincer & Orbach (1995) の結果(安定群の人が悲しみや喜びに関するエピソードの想起に要する時間は、怒りや不安を想起する時間に比べて短い)とも矛盾しない結果といえる。以上の結果は、安定した愛着傾向を持っている人ほど、概して、情動に対して比較的自由に意識を向けることができ、中でも特に、他者との絆を深める役割を持つ、悲しみや喜びといった情動を、他者や自分を理解する手がかりとして相対的によく用いている可能性があることを示唆している。このような態度が、親密で安定した対人関係を維持させるメカニズムとして機能しているのではないかと考えられる。

回避的な愛着も、悲しみと喜びに対する態度と関連があることが見出されたが、その関連の仕方は、安定的な愛着のそれとは対照的であった。分析1では、回避性の高さは、悲しみに対する不快感の高さや、喜びに対する内省や覚知の低さ、不快感の高さと関連していることが示された。これは、Magai et al. (1995) の結果(回避傾向の高い人は快情動の解釈が正確ではない)とも部分的に合致している。また、分析2では、回避群に分類された人は、安定群の人に比べ、悲しみや喜びといった情動に対してより不快感を持っていることが示

された。これらの結果は、対人関係において回避的な傾向が強い人ほど、他者との関係を深めることにつながりやすい、悲しみや喜びといった情動に対して否定的な構えを持っており、それは意識の上では、他者の悲しみや喜びに触れたり、自分が悲しみや喜びを経験したりすることに対する不快感として認識されていることを示唆している。いっぽう、予想に反して、回避性の高さや情動に対する内省の低さや自己覚知の低さとの間には、あまり関連が認められなかった。このことと先行研究の結果とを併せて考えると、対人関係において回避的な傾向が強い人は、意識下での情動情報の処理においては抑圧的であるとされるが、そのこと自体は本人にはあまり自覚されていない可能性があることを示唆するだろう。

両価的な愛着は、特に、怒りや喜びに対する意識的な態度と関係していることが明らかになった。分析1では、両価性の高さは、自他の怒りの覚知の低さと関連していることが示された。分析2でも、両価群に分類された人は、怒りに対する内省や他者の怒りの覚知が相対的に低いことが示された。これは、両価傾向の高い人ほど怒りの解釈が不正確であるという Magai et al. (1995) の結果とも部分的に合致する。これらの結果は、対人関係において両価的な態度傾向を強くもっている人ほど、潜在的に自分と他者との関係性を壊す危険のある怒りを客観視することが難しいことを意味するだろう。両価性の高い人ほど、怒りの主観的経験の頻度は高いことと併せて考えると、両価的な愛着傾向が強い人は、怒りを意識化できないのではなく、怒りに関する情報の深い処理が苦手なのではないかと推測される。

また、両価性の高さは、悲しみに対する不快感の高さや喜びに対する覚知の低さとも関連していた。同様の関連は、回避性に関しても見られたが、この関連が意味するところは両者では若干異なると解釈すべきかもしれない。推測だが、両価性の高い人が悲しみに対して不快感が強いのは、悲しみの経験や表出を自分でコントロールすることが苦手であることとより関係しているのかもしれない。また、喜びの覚知が低いのは、不快情動の経験に意識が向く分、相対的に喜びに対しては注意が向かないためであるのかもしれない。

両価性に関して見られた以上の関連は、両価的な愛着の背景に、相対する機能を持つ2つの情動、すなわち、怒りという他者との関係を断ち切ることにつながりやすい情動と、喜びという他者との関係性を築き、深めることにつながる情動に対する、意識の上での

偏った構えがあることを示唆するだろう。そして、これらの態度が、対人関係における不安定さを維持することにつながっているのではないかと解釈される。

今後の課題として、今回は愛着と個別情動の情報処理との関連を検討する際、4つの情動を取り上げたが、さらに他の情動についても検討してみる意義があるだろう。また、情動に対する意識的態度を調べるのに質問紙を用いたが、この質問紙に答えるにはある程度の内省が必要とされる。ゆえに、普段から情動をあまり意識しない人には回答が難しい可能性がある。こうした人に質問紙で測られたものがどの程度妥当であるのかを検討することも、今後必要と言えるかもしれない。

引用文献

- Ainsworth, M. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. 1978 *Patterns of attachment: A psychological study of the Strange Situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Barrett, K., & Campos, J. 1987 Perspectives on emotional development: II. A functionalist approach to emotions. In J. Osofsky (Ed.), *Handbook of infant development* (2nd ed.). New York: Wiley. Pp.555—578.
- Bowlby, J. 1969 *Attachment and loss, Vol 1: Attachment*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. 1973 *Attachment and loss, Vol 2: Separation*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. 1980 *Attachment and loss, Vol 3: Loss, sadness, and depression*. New York: Basic Books.
- Bretherton, I. 1990 Open communication and internal working models: Their role in the development of attachment relationships. In R. A. Thompson (Ed.), *Socioemotional development (Nebraska Symposium on Motivation, Vol. 36)*. Lincoln, Nebr.: University of Nebraska Press. Pp.1—56.
- Campos, J.J., Campos, R., & Barrett, K.C. 1989 Emergent themes in the study of emotional development and emotion regulation. *Developmental Psychology*, **25**, 394—402.
- Cole, P.M., Michel, M.K., & Teti, L. 1994 The development of emotion regulation and dysregulation: A clinical perspective. In N.A. Fox (Ed.), *The development of emotion regulation: Biological and behavioral considerations. Monographs of the Society for Research in Child Development*, **59**. (2—3, Serial No.240.) Pp.73—100.
- 遠藤利彦 1992 愛着と表象—愛着研究の最近の動向: 内的作業モデル概念とそれをめぐる実証研究の概観— *心理学評論*, **35**, 201—233.
- Fraley, R.C., & Waller, N.G. 1998 Adult attachment patterns: A test of the typological models. In J.A. Simpson & W.S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. NY: Guilford Press. Pp.77—114.
- George, C., Kaplan, N., & Main, M. 1996 *The Berkley Adult Attachment Interview*. Unpublished manuscript, Department of Psychology, University of California, Berkley (Third edition).
- Gottman, J.M., Katz, L.F., & Hooven, C. 1997 *Meta-emotion: How families communicate emotionally*. Mahwah, New Jersey: LEA.
- Hazan, C., & Shaver, P.R. 1987 Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511—524.
- Izard, C.E., Libero, D.Z., Putnam, P., & Haynes, O. M. 1993 Stability of emotion experiences and their relations to traits of personality. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 847—860.
- Magai, C., Distel, N., & Liker, R. 1995 Emotion socialization, attachment, and patterns of adult emotional traits. *Cognition and Emotion*, **9**, 461—481.
- Main, M. 1990 Cross-cultural studies of attachment organization: Recent studies, changing methodologies, and the concept of conditional strategies. *Human Development*, **33**, 48—61.
- Main, M., & Goldwin, R. 1985—1999 *Adult attachment scoring and classification system*. Unpublished manual, Department of Psychology, University of California, Berkley.
- Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. 1985 Security in infancy, childhood and adulthood: A move to the level of representation. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.), *Growing points of attachment*

- theory and research, Monographs of the society for Research in child Development*, **50** (1-2, Serial No.209), 66-104.
- Malatesta, C.Z., & Wilson, A. 1988 Emotion/cognition interaction in personality development: A discrete emotions, functionalist analysis. *British Journal of Social Psychology*, **27**, 91-112.
- Mikulincer, M., & Florian, V. 1995 Appraisal of and coping with a real life stressful situation: The contribution of attachment styles. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **21**, 406-414.
- Mikulincer, M., Florian, V., & Tolmacz, R. 1990 Attachment styles and fear of personal death: A case study of affect regulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 273-280.
- Mikulincer, M., & Orbach, I. 1995 Attachment styles and repressive defensiveness: The accessibility and architecture of affective memories. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 917-925.
- Pietromonaco, P.R., & Barrett, L.F. 1997 Working models of attachment and daily social interactions. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 1409-1423.
- 坂上裕子 1999 感情に関する認知の個人差—感情特性と曖昧刺激における感情の解釈との関連— 教育心理学研究, **47**, 411-420.
- 菅原健介 1984 自意識尺度(self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, **55**, 184-188.
- Simpson, J.A., Rholes, W.S., & Nelligan, J.S. 1992 Support seeking and support giving within couples in an anxiety-provoking situation: The role of attachment styles. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 434-446.
- 戸田弘二 1988 青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル: 作業仮説(working models)からの検討 日本心理学会第52回大会発表論文集, **27**.
- 詫摩武俊・戸田弘二 1988 愛着理論からみた成人の対人態度: 成人版愛着スタイル尺度作成の試み 東京都立大学人文学報, **196**, 1-16.
- Tomkins, S.S. 1962 *Affect, imagery, consciousness. Vol.1: The positive affects*. New York: Springer.
- 辻平治郎 1993 自己意識と他者意識 北大路書房 (2000.2.17 受稿, '01.1.16 受理)

Attachment and Emotion Regulation: Attachment and Conscious Attitudes Toward Four Discrete Emotions

HIROKO SAKAGAMI (DEPARTMENT OF PSYCHOLOGY, FACULTY OF LETTERS, TEIKYO UNIVERSITY) AND MAKI SUGANUMA

(RESEARCH FELLOW OF THE JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2001, 49, 156-166

The purpose of the present study was to investigate the relation between adult attachment as an individual's interpersonal style and that person's emotion regulation. In Study 1, a questionnaire measure of conscious attitudes toward 4 discrete emotions (anger, sadness, fear, and joy) was developed to measure individual differences in emotion regulation. Factor analysis of this scale yielded 4 factors: reflection on emotions, awareness of one's own emotions, awareness of other's emotions, and negative feelings about emotions. In Study 2, 208 university students completed a scale of adult attachment and the scale of conscious attitudes toward 4 discrete emotions. The results indicated that secure attachment was related to open attitudes, especially about sadness and joy, and to higher reflection on and higher awareness of these emotions. In contrast, avoidance attachment was related to higher negative feelings about sadness and joy. Ambivalent attachment related to biased attitudes, particularly toward anger and joy, and to lower reflection on and lower awareness of these emotions. These findings suggest that each attachment style is characterized by different attitudes toward specific emotions at a conscious level.

Key Words: emotion regulation, attachment, conscious attitudes, discrete emotions, university students